

持続可能な里山と農村社会のための実践活動に関する研究

事業代表者 教育学部・教授・松居誠一郎

構 成 員 教育学部・准教授・松村啓子、同・非常勤講師・赤堀（谷）雅人

1. 事業の目的・意義

茂木町は県内で那珂川町とともに過疎地域に指定されており、高齢化、人口流出、生活基盤の脆弱化といった多くの課題を抱えている。自治体自身は地域振興に極めて意欲的で、行政主導のさまざまな振興策が企画され、大学等の外部組織との連携にも積極的である。また住民も外部組織の受け入れにオープンな姿勢が見られる。本地域は豊かな自然環境や里山の生業といった魅力に富みながら、棚田オーナー制度といった開放的な活動が行われ、また宇都宮市や首都圏からのアクセスが良いという条件にも恵まれている。申請者は茂木町役場および地元住民と連携し、里山地域の地域資源の掘り起こしを行い、自然、農産物、観光（エコツーリズム、アグリツーリズムなど）などの魅力を積極的に外部に発信する方途を研究し、また生活のための様々なインフラの維持についても方向性を探りたい。またこうした研究活動に学生が参加し、新鮮な視点での提言ができるようにするとともに、学生の行動的知性の育成にも活かしたい。

本事業の実施に当たっては、茂木町入郷地区の住民のみなさん、入郷棚田保全協議会、茂木町役場、美土里館、茂木中学校、道の駅もてぎ、など多くの個人、団体のご協力のもとに実施されたことを記し、深く感謝申し上げたい。

2. 研究方法（又は事業内容）

(1) 研究計画と方法

上記のような提言を行うための基礎として、里山地域の自然と農村社会の調査を行う。農業生産、生計、土地利用、景観、さらに地域の人的関係、買物や病院利用といった生活全般にかかわる様々な条件や、現在活発に行われている棚田などのオーナー制度、全国的にも評価の高い「道の駅もて

ぎ」の活動などを現地調査によって明らかにする。申請者は平成24年度以来、上記に関連したテーマで茂木町を舞台に「里山のサステナビリティを考える」というアクティブラーニング科目を開講し、継続した調査と提言の活動を行って、地元の自治体および住民から一定の評価をいただいている。今年度はこうした実績と信頼関係を基礎にさらに実効性の高い提言ができるように研究を進めたい。

今年度は特に里山地域の土地利用について詳細な調査を計画している。これに前年度までに得た魅力のある自然と景観、農業生産を中心とする生業の推移、生活空間の編成、村づくり活動に関する知見を総合して、農業生産や観光資源の開発と外部への情報発信について検討したい。



図1 茂木町入郷地区における耕作放棄地の植生調査。班ごとに区画を分担して調査し、放棄後の年数で植生が変化する様子を明らかにした。5月24日。

(2) 成果の地域活用

地元報告会：調査に協力していただいている地元住民と自治体関係者を対象に今年度の調査結果および提言の中間報告を7月に予定している。SNSによる情報発信：申請者および学生の活動をフェイスブックで公開しており、この中に地元の魅力

ある農業・自然・観光の資源を積極的に紹介するようにする。

自治体との協議：茂木町役場の職員との協議を通じ、地元ニーズについての理解を深めるとともに、調査によって得られた情報を積極的に還元できるようにする。地元および自治体に対して調査結果を集成した地図類の提供を計画している。

(3) 成果の教育展開

上記のように平成24年度以来、調査地域を対象に「里山のサステナビリティを考える」というアクティブラーニング科目を開講している。今年度で一つの地域を4年間にわたって調査したことになり、自然と農村社会に関する基礎情報がほぼ集まると予想している。次年度以降、こうした成果を踏まえ、より実質的な提言ができるように考えたい。さらに現地における農業生産の維持、観光振興などに寄与する作業的活動を企画できないか検討したい。こうしたことを通じて実感をもって地域を理解し、地域のために積極的に働くことができる人材の育成を目指したい。

表1 平成27年度「里山のサステナビリティを考える」授業日程

5月16日	土	10:00-16:00	大学・室内実験
5月17日	日	8:30-17:00	茂木町入郷（田植え・調査）
5月24日	日	8:30-17:00	茂木町入郷（調査）
5月26日	火	12:30-17:30	茂木町役場・美土里館・茂木中
5月30日	土	8:30-17:00	茂木町入郷（調査）
6月13日	土	10:00-16:00	大学・室内実験
6月20日	土	9:30-21:00	道の駅見学、入郷（調査・草取り／ホテル鑑賞会）
6月27日	土	10:00-16:00	まとめと発表準備（大学）
7月4日	土	8:30-14:30	茂木町入郷（調査報告会）
7月12日	日	9:00-17:00	佐野市（棚田）

3. 事業の進捗状況

この授業では入郷地区の土地利用調査に加え、棚田オーナー制度の活動への参加、茂木町職員の講話、町施設の見学、道の駅の見学と講話、などを通じて、地域の実情を実感を持って理解できるようにした。こうした経験や学びを基礎として、



図2 地元木材をふんだんに使って建てられた茂木中学校の見学。5月26日。



図3 「道の駅もてぎ」において地元の農産物やその加工品の販売の様子を見学した。店長の黒崎氏より企画立案や営業の工夫について説明を受けた。6月20日。

地域の持続可能な発展のために意義のある提案を行うことを目標に掲げた。

平成27年3月25日に茂木町役場において役場職員と事業実施について打ち合わせを行った。

授業日程は表1の通りで、このうち5月26日と7月12日は任意参加とした。また後述のように受講者を中心に11月1日の地元の行事に参加した。

授業の具体的な活動として「茂木町入郷地域の土地利用調査」を実施した。現地での野外観察、農家の方への聞き取り調査、空中写真や地図の読み取りなどを実施した。現在の土地利用状況だけでなく、休耕となった場所の過去の利用履歴も推定し、土地利用の歴史的変遷を明らかにするようにした。18名の受講者（うち15名は「実証的研

究演習」として受講)を3名ずつの6グループに分けて、調査および提言はこのグループごとで実施した。



図4 入郷地区の棚田オーナー制度の田の草取り作業に学生が参加した。6月20日。

さらに茂木町で行われている様々な地域振興の試みについて実地に見学する機会を設けた。入郷地区で行われている棚田オーナー制度の活動(田植え、草取り、ホテル観賞会など)に参加させていただき、地元農家や棚田オーナーの方々との交流をもった。

5月26日には茂木町役場で町の現状と行政施策の説明を受け、バイオマス資源の再生を実施する美土里館および、地元木材を活用して建てられた茂木中学校を見学した。

6月20日には全国的に見ても成功例と言われている「道の駅もてぎ」の見学をおこない、そのあと入郷地区の棚田オーナーさんたちの草取り作業を手伝い、またホテル観賞会に参加させていただいた。

6月27日には大学内でそれまでの土地利用調



図5 持続可能な地域社会形成のための提案をグループごとに検討した。6月27日。

査結果、町役場や道の駅で学んだ内容、地元の方々や棚田オーナー制度のメンバーの方々から伺ったお話しなどを総合し、グループごとに最終発表の準備を行った。

7月4日の発表会は入郷地区において、調査にご協力いただいた地元の方々の前で実施した。

発表テーマは次の通りであった。

- A: “里山の持続性”を考える
- B: 雑草ライフ ～食べてみよう編～ ～キレイキレイ編～ ～持ち歩こう編～
- C: MOTEGI × CREATIVE ～新しい茂木の味わい方～
- D: 地元泊まろう!
- E: いきものハカセになろう!
- F: 茂木PRイベントの提案

またこれ以外に教員から土地利用調査の結果について報告をおこなった。



図6 発表会 7月4日。

7月12日の佐野市葛生の見学は授業外で行ったが、多くの参加者があった。葛生地区の自然、中山間地農業、石灰岩産業の盛衰、野生鳥獣の被害について実地で学んだ。茂木とは立地や歴史的背景が異なるが、共通性もある中山間地の多様な実態を学ぶことができた。

授業期間から外れるが、11月1日の棚田オーナーの米引渡し・収穫祭に参加させていただいた。7月4日の発表のうち、すぐに実現可能と思われるCグループの「茂木の食材を使った料理の工夫」の提案をこの場で実際に試み、オーナーの方々や地元の方々に味わってもらうことができた。この

日は授業受講者から数名の参加があり、さらに過去にこの授業を受講した学生などが10名以上参加した。



図7 佐野市葛生地区見学。この土地の食材のお料理をご馳走になった。7月12日。

4. 事業の成果

今年度の授業では農作業に参加させていただくなど、実地で作業する活動を多く取り入れるようにした。田植えや草取りなどの農作業やホテル観賞などを通じて、地域の自然と社会について実感のある理解が深まり、そのことが実質性のある提案に結び付いたと考えられる。

こうした経緯のなかで11月1日の米引渡し日の活動は学生提案の内容が実現し、地元やオーナーの方々に好評で、また受講者以外の学生を含め幅広い関心を集めることができたのは大きな成果であった。この場では学生の料理の他に、餅つきなどの地元からの振る舞いの準備に学生が積極的に参加したことは、地元の方々、特に主婦層から好意的に受け入れられたようである。学生の能力形成のみならず、地域と大学の結びつきを強めるという面でもこうした活動の重要性が明らかであった。

5. 今後の展望

平成28年度もこの事業は継続実施の予定となっている。今回の実施内容を振り返ると、学生の能力形成と大学の地域連携の両面から見て、実践的、体験的活動の意義が大きいといえ、来年度の事業実施においてもこの点を重視することになる。

一方でこうした活動を重視した場合、多くの時

間を要し、特に現地での活動時間が増えることになる。今回の授業はほとんどが土日の不定時に実施したのであるが、他の不定時授業との兼ね合いで出席が難しい学生も散見された。学生と教員の負担を軽減しつつ、実質性の高い授業を行う方策を検討する必要性が大きくなったと言える。



図8-10 収穫祭。11月1日。